

〔参 考〕 帰化植物の特性

- (1) 一般に一年生植物が多い。多年生のは少なく、木本性のものは稀である。
- (2) 種子や果実の散布力や付着力が大きい。
- (3) 種子の発芽に特別な条件を必要としないものが多い。
- (4) 種子からの発芽後、幼植物は急激な生長をする。
- (5) 多量の種子を作るものが多く、また一生を通じて種子を作る期間が短い。
- (6) 気候や土壌などの環境の変化によく適応して生活できる。
- (7) 一般に窒素分の多い（富栄養な）土地によく生育する。
- (8) 日なた植物が多い。

### 3 タンポポ（在来種と帰化種）で環境を診断する

欧州原産のセイヨウタンポポは、在来種（エゾタンポポ、カントウタンポポなど）を圧して、今では日本全土にひろがっている。在来種と帰化種の自然の中での生態のちがいを、いろいろな角度から調べて、タンポポの種類と環境との関連を考えてみる。

(1) 準 備

調査地附近の地図、調査用紙、巻尺、方形枠、ロープ、数取器、PH計

(2) 方 法

① タンポポ地図をつくってみる。

市町村域、学区などえらび、在来種と帰化種を調べ分布図をつくる。2種のタンポポは総苞の外片の形で見わけることができる。セイヨウタンポポでは、総苞の外片が下向きにそりかえり、在来種ではそりかえらない。つぼみでも花が咲いたあとでも同じである。

調査区域は、なるべく環境条件の異なるところをえらび、方形枠でなくても、小さなクイを4本用意し、ロープでかこんだ枠内のタンポポの数をかぞえてもよい。枠の大きさは、調査地の状況に応じて設定する。

調査地点の土地の特徴も調べておく。在来種と帰化種の割合を求めて、調査結果を地図上に整理してまとめる。

② タンポポと環境のつながりを考えてみる。

タンポポ地図と生育環境を結びつけて、まとめをしてみる。どんな環境条件下に、両種が分布しているか。またその原因となっているものについて考えてみる。

③ 在来種と帰化種の特徴・生態を調べる。

- ア 花の大きさ
- イ 花びらの形
- ウ 花びらの数
- エ 開花、結実の日数
- オ 種子の大きさ
- カ 種子の数 綿毛のつく時期に数える。1株あたりの種子数を計算してみる。

